

## 高麗螺鈿と青磁象嵌の文様について

中 川 千 咲

高麗螺鈿器は盛行したわりに遺品極めて少く、各々の製作期の詳細、或は意匠の推移などを知ることは、なかなか困難である。同じ高麗期の精技たる青磁、象嵌青磁はこれに比すれば遺品も多く、その意匠は螺鈿の意匠と関連があると思われるので、かかる面から兩者の關係を求めて見るならば、高麗螺鈿研究の集成に際して何らかの参考になることと思ひ、驥尾に付し少しく述べてみることにした。

高麗の螺鈿と陶磁の意匠關係は、先づ器形に於て、元李王家博物館藏の螺鈿油壺、松葉形盒子と全く同様式のもの象嵌青磁にはよくあるし、黒漆組寄盒子の如く、懸子の中に小笠と、花形の盒子を中心に四つの松葉形盒子を組込み、一セットとしたのと同じものが矢張青磁象嵌の中に見られる。又、同館の立菊散螺鈿手箱、東京國立博物館、黎明會、某氏藏の螺鈿經箱に見る蓋に大きな削面のある様式は東京國立博物館、元朝鮮總督府博物館等の青磁や青磁象嵌の透彫箱などと共通しており、これら磁製の箱は入角形となつてゐるが、立菊散手箱はその點も全く同じである。

以上のうち組寄盒子は樂浪出土の鏡奩、或いは宋の定窯に小壺や小盒を据え付けた盒子があり、それらの影響によるものと思われるし、蓋の削面を大きくとつた箱の形は、宋代漆藝品の器形に倣つたものと考えられる。器形の中には宋代工藝意匠の影響によるところがあるとしても、陶、漆藝品に前述の如く全く同様式のものがあり、又金工の水瓶にも青磁象嵌の水瓶と同形のものが見られ、當時は陶、漆藝品相互の間のみならず、廣く工藝意匠の間に可成密接な關係があつたと思はれるのである。

この器形に於ける關係と共に、又文様にも同じ様式のものが多く相互の關係の益々深いことを知るのであつて、今、遺品の多い青磁、象嵌青磁中の螺鈿器と類似する文様の推移を眺めることによつて双方關連の様相の一端でも窺えるのではないかと思ふ。

先ず螺鈿に於ける文様の主なものを、元李王家博物館所藏の出土品である黒漆螺鈿瑠璃立菊散文手箱、漆塗螺鈿唐草文松葉形盒子、漆塗螺鈿及描金蒲柳雜樹水禽文香箱及び傳世品の東京國立博物館藏

漆塗螺鈿立菊散文經箱、當麻寺藏黑漆螺鈿瑠璃唐草文念珠筥、桂春院藏黑漆螺鈿瑠璃唐草文松葉形盒子、大倉集古館藏漆塗螺鈿唐草文小箱、黎明會藏黑漆螺鈿唐草文經箱、中村氏舊藏の黒漆螺鈿唐草文經箱によつて見ると次の如くである。各文様のそれぞれの器物に於ける裝飾法、材料、技術等の詳細については、吉野氏の論文に記されたので、ここでは主に各文様のみについて述べる。

挿圖 1. 漆塗螺鈿立菊散文經箱 部分  
東京国立博物館藏

唐草文 莖の曲線が各花を抱き込むようにし、葉は勾玉のような形をしており、花には菊花及び蓮花或は牡丹と思われるものがある。菊唐草と見られるものは黎明會の經箱、當麻の念珠筥、元李王家博物館、桂春院の家博物館、

葉が菊唐草と同じ勾玉形をしているものがあり、大倉小箱の蓋縁、黎明會經箱の縁、國立博物館藏經箱蓋の剖面に用いられている。

立菊文 菊花の上部に四枚、左、右に三枚づつの葉形を配し、下部に枝と四枚の葉を附したものである。國立博物館經箱、元李王家博物館の立菊文手箱、蒲柳水禽文香箱の懸子は全體がこれで飾られている。只國立博物館の經箱は枝が二つに分かれ、蓋のは菊花を中心に四方に葉形を配したものとなっている。

禪文 十字の先がそれぞれ三角形に尖つてあり、蒲柳水禽文香箱、松葉形盒子、念珠筥、國立博物館經箱に縁文、或いは境界の文様として用いられている。

連珠文 通例の圓文を連続したもので、國立博物館、黎明會の經箱、大倉の小箱、元李王家博物館の立菊文手箱、桂春院の盒子に縁文、境界文として附されている。

龜甲繫 普通見る様式で中に花文があり、桂春院の盒子、元中村氏の經箱にある。

星形 八本角のある星形の如きもので、花形とも見える。當麻の念珠筥、國立博物館の經箱に附隨文としてあり、後者では禪文と交互に並べた文帯をなしている。

その他 一つの器物だけに見られるものは、元李王家博物館の立菊文手箱の風景圖、七寶繫、香箱の蒲柳水禽文、油壺の圈内の唐草文、當麻寺念珠筥の唐草文、元中村氏經箱の麻葉、大倉小箱の雲形の如き文様などである。

松葉形盒子、大倉の小箱に主要文として、元李王家博の蒲柳水禽文香箱に縁文として用いられ、同じく立菊文香箱の蓋にもそれらしい跡が見える。蓮花或は牡丹唐草と思われるものは、中村雅真氏舊藏の箱に主要文としてあり、これは葉が他に見ない異形で繁雜な形をしている。莖が曲線でなく、二枝を並べ直線に繋いだような形をし、

次にこれらの文様と相似たものを陶磁の文様中に拾うと、青磁、白磁には透彫、陰刻、陽刻で表わされた唐草、立菊、蒲柳水禽等あり、又繪高麗にも唐草文等があるが、最も似たものは象嵌青磁の文様に見られる。即ち、立菊、菊唐草、蒲柳水禽、禪文、連珠文などであり、禪、連珠文は高麗に限らず、廣く用いられるので姑らく措くが、立菊、菊唐草は多く見られ、殊に立菊文は花の上部と左、右に三枚づつの葉を配し、下部に葉と枝を附したもので、国立博物館や元李王家博物館蔵の箱の立菊と花に精粗の差はあるがほとんど同じであり、盛んに用いられている。よつて象嵌青磁に於ける立菊文を中心とその推移を見、螺鈿器との關係を求めたいと思う。

高麗青磁の起源については明らかでないが、淳化四年(九九三)刻銘の青磁の壺があるので、その頃には古風なものながら存在していたことが分かり、十六代睿宗頃(一一〇六—一一二二)に至つて所謂青磁が出来、つづく仁宗、毅宗、明宗頃(一一二二—一一九七)にはすぐれた青磁が焼かれたといわれている。そして仁宗頃までの約四十年間は北宋の定窯、汝窯等の作を範として中國陶磁の模倣に力がそそがれ、以降二十二代康宗(一一二二—一一三三)にかけての六十餘年間は中國の模倣から轉じて、高麗獨特の象嵌青磁、白磁に黒象嵌をしたもの、繪高麗、練上手、青磁象嵌に辰砂を加えたもの等、その作風、技術に大きな變化が示されたのである。

さて象嵌青磁のはじめを見るに、中尾萬三博士の「朝鮮高麗陶磁考」によると、宋の宣和五年(一一二三)徽宗の使として高麗に十七代仁

宗元年渡つた徐兢が朝鮮に於ける見聞を詳述した「宣和奉使高麗圖經」中、青磁や螺鈿について記しながら象嵌青磁に關しては觸れていない點等から、この頃以後、即ち十八代毅宗朝(一一四七—一一七〇)に始められたと推定されている。又其の始まりは、新羅時代の石器に刻した朝鮮流の印紋と、當時相當發達していた螺鈿の如きもの方法から想い付き、一方に於て、製陶上に於ける技術の低下から象嵌を爲すようになったのであらうと云つておられる。

又、野守健氏の「高麗陶磁の研究」によつて要旨を見ると、高麗圖經に象嵌青磁の記述無く、十八代毅宗十三年(一一五九)頃と窺知される文公墓誌附石棺の伴出物中や、十九代明宗(一一七一—一一九七)の智陵からの出土品中に象嵌青磁の盤、碟が發見されている點などから、最大限高麗圖經の書かれた翌年の仁宗二年以降毅宗十三年までの間に工夫されたと思知されている。そしてはじまりについては、宋窯の影響を受けて白堆文起り、次に黒土を以て文字を書いたり、或は象嵌したもの、黒土を以て文様を描いた所謂繪高麗が出来、然る後、文様を象嵌することが工夫されたと想像しておられる。又仁宗以前に既に白堆線文及繪高麗が行われていたことが大口面の窯址出土陶片によつて推定され、且つ形態及び釉色等から青磁最盛期以前に屬すると思われるもので、黒土で文字を書いたもの、或いは象嵌したものが古墳から發見されているところから、高麗圖經に所謂象嵌青磁の記事が無かつたとしても、其以前に文字を象嵌することは工夫されていたようであり、文様ある象嵌青磁も仁宗二年以後遠

くない時期に始められたと想像されている。

仁宗、或いは毅宗から模様を施した象嵌青磁が始まったとして、當時青磁の陰刻、陽刻の文様などに比し、素地に陰刻して白土、或いは赭土を埋める象嵌技術に於ては、文様はその効果が大きいだけに重要となり、従つて、文様も従来より更に多く種々のものが求められ、作られたことは、以後、雲

挿圖 2. 青磁象嵌盤 (文公墓誌附石棺に伴出) 【朝鮮古蹟圖譜】八より

鶴、蒲柳水禽、牡丹、蓮など多種多様の文様が急に盛行したのを見ても察せられよう。これら求めた文様中には高麗の青磁、或いは中國陶磁のものを倣つたものも勿論あつたと思われるが、立菊も、未だ宋窯の影響顯著な青磁作品中に陰刻などで現わされた花折枝文が見られ、更に宋窯の中には寶相華、或いは牡丹の如きものの折枝文があるの

で、そうしたものの影響で出現したのではないかとも考えられる。又、前述の中尾博士の言われる如く、象嵌技術を螺鈿に學んだとすれば、螺鈿器の文様も倣つたであろうし、これを別としても、螺鈿は七代穆宗朝、既に宮室の調度を製作する中尙署内に於て螺鈿を

用いた器物が作られ、十一代文宗(一〇四七—一〇八二)頃には工匠達も優遇されたようであり、十七代仁宗元年には高麗圖經に「細密可貴」と賞されている如く、以前から優れた螺鈿器が製作されていたのであるから、(岡田譲「高麗螺鈿器」日本美術協會報告四六)恐らくこれらの意匠の或るものは範となつたとも思われる。

挿圖 3. 青磁象嵌菊花文六花形碟 (十九代明宗智陵出土) 【高麗陶磁の研究】より

このように急に豊富になつた象嵌青磁の文様中、立菊文が多く見られることは前述の如くであるが、その早いもので

は先ず毅宗十三年頃と推定される文公墓誌附石棺伴出の盤、及び碟がある。盤は内面中央に菊花文を口縁近く唐草文帯を繞らし、その間に精美な寶相花文を附し、外面口縁に唐草文帯、高臺近く蓮瓣文を配し、その間に立菊文を五ヶ所に布置する。碟は内面中央圈内に立菊文を、外周に如意頭文帯を作り、内外側面共に立菊文を五ヶ所に配している。



次に十九代明宗智陵から發見された六花形碟は内面中央に二重圈を設け、中に立菊文を入れ周縁に花枝六ツを配してあり、又菊花文碟も中央二重圈内に菊花文を置き、圏外に沿つて如意頭を、周縁に唐草文帯を繞らし、帯下と外面にそれぞれ五ヶ處に菊花文を配置している。(野守健著「高麗陶磁の研究」第四青磁象嵌)

これらの立菊文は、菊花の上、左、右にそれぞれ三枚の葉を配し下に葉と枝を附したもので、元李王家博物館の香箱の立菊文と花には精粗の差があるが、先ずほとんど同じ様式である。毅宗明宗から康宗に至る象嵌青磁盛期と鑑せられる作には、これ以外にも同様の立菊文が多く見られ、又同じ立菊文に蕾を上部に配したものの、これらを堅につないだもの、或は花を二つ、三つ付けた類がある。しかしいずれもはじめの簡単な構成のものを基本として、少しづつ變化を加えているに過ぎないようであり、中には主要文としての役割を失っているものも多く、配置法も整正され、精巧な作行を示している。

次いで二十三代高宗から二十五代忠烈王頃(二二四—二三〇)に至る九十餘年間には、主として象嵌青磁を焼き、引續いて繪高麗、辰砂、鉄彩手も作り、初期はなかなか精巧なものもあり、象嵌青磁に

金彩を施したものも出たが、次第に器形、文様もくずれ、作風も粗厚となつて來た。

立菊文も引續いて行われ「己巳」「庚午」「壬申」「癸酉」「甲戌」といつた銘のある即ち二十四代元宗の十年から十五年(二二六—二二七)に焼かれたと見られる盃や碟に從來と同じ様式のもの、或は複雑化したものが見られる。しかしそれらは前期のものに比して、可成くずれてあり、或るものは形式化し萎縮し、裝飾全體にも從來のような引きしまつた整正さが見られなくなつてゐる。

又これに續く二十五代忠烈王時代のものと見做される慈靜國師妙光塔改修の際發見された青磁象嵌雲鶴文盒子(野守健著「高麗陶磁の研究」三三頁—三四頁)は、蓋の上中央に二重圈内に三輪の菊花文を、周圍四ヶ處に二重圈内に立菊文を配し、その間を雲鶴文で埋めたもので、この立菊文は從來の基本的な

挿圖 4. 青磁象嵌菊花文瓶

挿圖 5. 青磁象嵌菊花文瓢形瓶

立菊文と同じであつて、整正された作ではあるが、文様全體としてやや煩瑣の感が窺えるのである。

象嵌青磁も最盛期、それに次ぐ期を経て、二十六代忠宣王より三十四代恭讓王(一三九〇—一三九一)に至る頃になると、引續き象嵌青磁も焼かれてはいたが作風は粗雑となり、釉薬の調合や焼成が低下して色も悪く、形はくずれ、文様も粗略となつて高麗青磁も墮落衰退期に至つた觀があり、又繪高麗、鐵砂、白磁なども焼いたが、青磁と同様粗雑なものとなつた。

三十一代恭愍王(一三五二—一三七四)の末年といわれる正陵銘ある碟(野守氏の「高麗陶磁の研究」によると、正陵は三十一代恭愍王妃の陵名で、王妃薨去の恭愍十四年(一三六五)から王薨去の二十三年(一三七四)の間に大

口面に於て焼成されたと推定されている。)や、己巳銘、作行から恭讓王元年作と鑑せられる碟に立菊文が見られるが、作風と共にくずれ、粗雑なものとなつてしまつてゐる。

こうした象嵌青磁に於ける立菊文及び裝飾法等の推移から、同じ立菊文のある國立博物館の經箱を中心として螺鈿の遺品について考へて見よう。國立博物館の經箱は、蓋に螺鈿の連珠文と花形に裨との二重枠を劃した内に菊花文を配列し、中央に螺鈿にて「大方廣佛華嚴經」の題簽があり、削面には蓮唐草を直線的にしたものと、菊唐草を附し、身には三重の枠を施した内に立菊文を嵌裝している。蓋の菊花文は花を中心に四方に三枚づつの葉形を配してあり、身の立菊は菊花の上部に五枚、左、右に三枚の葉形を置き、下部に葉と

挿圖 6. 青磁象嵌己巳銘菊花文八角碟

挿圖 7. 青磁象嵌己巳銘菊花螺文盤

挿圖6, 7 共「朝鮮古蹟圖譜」八より

挿圖8. 青磁象嵌雲鶴文盒子

(慈靜國師妙光塔改修の際發見)「高麗陶磁の研究」より

二股の枝を附している。

これは最盛期の象嵌青磁に見た基本的な立菊文とほとんど同じ様式であり、且つ全體の裝飾法も繁雜でなく、整正されており、この文様、裝飾様式、端正な趣致を象嵌青磁の上に求めてみるならば先ず盛期の作品中に見出されよう。

しかし、この箱は吉野富雄氏の御説の如く、高宗版の藏經を容れるに用いたもので、高麗史にいう元宗十三年（一二七二）鈿函造成都監の置かれた頃の製作と考えられる。そして函側面の環座下に、分類記號、或は番號と見られる「貝二」の記號があつて、華嚴經の箱として數多く作製されたと思われ、更に鈿函造成都監の製作に係るとすれば、同様のもも多く産出されたと想像されるし、當時この函の如きものが螺鈿器の優れた一様式をなしていたと思われる。そうすると、元宗頃、象嵌青磁に於ては前述の如く、既に盛期を過ぎ五、六十年を経ていて文様、裝飾等複雑化し、くずれて來ていたのであるが、螺鈿器に於ては象嵌青磁の盛期に見た文様、裝飾、趣致の窺われる様式のものが行われていたことになる。しかしこの場合、螺鈿のかかる様式が盛期象嵌青磁の後を追ひ、直接習つて生れたものでないことは、次に述べる元李王家博物館藏の立菊文手箱によつて推察される。

元李王家博物館藏の立菊文手箱は、蓋に菊唐草らしいものと、連珠文帯を繞らし、その中に立菊文を左右に向けて散し、中心廓内に家屋らしいもの、垂柳等によつて一種の風景圖案を現わし、削面に

菊唐草を、蓋鬘と、身の上、入角の兩側に七寶繫を施し、下邊に花形を竝列している。これは可成腐蝕脱落しており、寫真による觀察であるから明らかなことは解らないが、立菊文は象嵌青磁盛期のもの、それも毅宗或いは明宗智陵出土の盃、碟に象嵌されている基本的と見られる様式のものと同じと似ていようであり、裝飾法も整正されており、且つ器形は象嵌青磁最盛期の作とされる國立博物館、元李王家博物館の透彫箱と同様入角形をなしている。前記國立博物館の經箱と比すると、兩者の立菊文、その配置法などほぼ同じであるが、蓋表の立菊は、この手箱では身と同じ立菊を單に左、右に向けて散してあるのに、國立博物館の經箱は菊花の四方に葉形を配し、恰も俯瞰した如く圖案して進んだものと見えるし、削面の裝飾法も經箱はやや複雑になつており、又全體として手箱には古様が窺われ製作時代は手箱の方が古いと考えられるのである。即ち、以上の諸點から見て、この元李王家博物館藏の手箱は先ず象嵌青磁最盛期頃の作と考えてよいのでなからうか。

そうすると、螺鈿に於ける立菊文、整正された裝飾法も象嵌青磁の盛期には既にあつたことになり、そして國立博物館の經箱によつて知られるように、少くも元宗頃まで比較的變化なく繼續していたと解せられる。即ち象嵌青磁盛期には、螺鈿、象嵌青磁にかかる様式が竝列して行われていたのが、象嵌青磁に於ては早くくずれてしまい、螺鈿に於て後まで持續されていたことになるのである。ただどちらに早く現れたのか、又どちらかが影響を受けたのかというよ

うな事情は何分にも螺鈿器の遺品が少ないので明かにし難い。

元李王家博物館の蒲柳水禽文香箱の懸子にも、立菊文が見られるようであるが、懸子の鮮明な寫真もないので觸れずにおく。この蒲柳水禽文は垂柳、萩の如き草木を配し、その根元に小石を點綴し、水面に數羽の鴨を浮べ、空に水禽の群飛する様を現わしたもので、象嵌青磁にも蒲柳水禽文は盛に用いられ、盛期には可成繪様風のものも見られ、後には様式化したものが行われたが、この箱のような大きな場面を扱つたものが少ないので、兩者の比較は出来にくい。

蒲柳水禽文について言えば、中尾博士は「朝鮮高麗陶磁考」に於て、十八代毅宗(一一四七—一一七〇)は舟遊びが好きで、遊び場の一たる別荘の衆美亭が、高麗史によると「……亭之南澗築土石貯水。岸上作茅亭。鳧雁蘆葦宛如江湖之狀。」とあつて、蒲柳水禽文を想わせる景であつたし、王は臨安に都していた南宋の文華を憶い、臨安西湖の風光にあこがれ、傳聞によつて蒲柳水禽の景を悦んだものと想像され、蒲柳水禽文が用いられたのは王の晩年からといわれる。

一方、高麗の陶磁ははじめあらゆる點で宋磁の影響を多く受けているので、定窯の盃などに劃花の蓮池水禽文が見えるから、蒲柳水禽文の現出はそれらとも關連があつたと考えられないであらうか。

なお一つの想いつきを言えば、この香箱の圖柄、趣致を見ると、契丹族の遼永慶陵の中室東南壁に描かれた春の圖が想い出されるのである。壁畫は土坡が斜に重りあい、その間にゆるやかな流があつて、白鳥、おしどり鴨などの水禽が三々五々遊んでおり、土坡には

杏花、平地にたんぽぽなど點在し、水邊のあちら、こちらには楊柳叢生があしらわれている。上部には積雲を思わせる雲と列をなして飛ぶ白鳥の群が描いてあり、この水邊の一部を摘出すると、圖柄、畫風に香箱の蒲柳水禽文と通ずるものが看取されるように思われる。

且つ、高麗圖經中に、「亦聞契丹降虜數萬人。其工技十有一。擇其精巧者留於王府。比年器服益工。」(第十九卷、民庶工技)とあり、遼の工藝技術が高麗へ影響を與えたことが窺われ、當時螺鈿器は高麗圖經に見られるように優れた技術があり、手法の如きは直接の關係はなかつたとしても、意匠等の上には何等かの影響はあつたのでないかと想像される。即ち遼に於て壁畫に見るような圖柄、作風が、繪畫或いは工藝意匠の上なりに存續していて、それがこの降虜工人達の手によつて高麗工藝のうちに傳えられ、このような蒲柳水禽文が生れる一助となつたとも考えられないであらうか。只、壁畫は遼六代の聖宗(九八三—一〇一三)の陵墓で、高麗圖經の書かれた高麗十七代仁宗元年(一一二二)までは百年近い隔りがあり、その間の様相は分かつたらず、工人達が高麗にて示した技術、意匠の詳細も明かでないので單なる想像に止まるかも知れない。

なお螺鈿器にも象嵌青磁にも唐草文は多く用いられているが、螺鈿の唐草は葉や蔓の構成に特色が見られ、象嵌青磁のも大體同じようであるが、やや簡單に現われているので、双方の比較が困難であるから、扱わないことにした。終りに吉野富雄、小山富士夫、岡田讓の諸氏から多くの御示教を得たことを感謝する。